

## 〈書評〉

Jay Parker and Joyce Wexler eds.

### *Joseph Conrad and Postcritique: Politics of Hope, Politics of Fear*

(Palgrave Macmillan, 2021, xiii + 233pp.)

筒井 遥

本論集は、2018–19年のModern Language Association大会での研究者9名による連続パネル(“Conrad’s Politics of Fear”と“Conrad’s Politics of Hope”)に基づく。本書の各章は、ポスト批評(post critique)と呼ばれる近年の批評理論の発展を受けたもので、政治的懐疑や実存的恐怖と結びついた従来のコンラッド像を超えて、より実生活に根ざした希望のコンラッド像を樹立することを志向している。とりわけ、西洋文明の欺瞞を見つめ続けたコンラッドに対する評価は、見かけ上の意味を疑い、表象に隠された前提やバイアス、真実の姿を暴くことを求めてきた「批評(critique)」<sup>1</sup>の動きと鏡写しのように呼応しながら発展してきた。批評のヘゲモニーに反動して生じたポスト批評<sup>2</sup>は、このようなテキストからの懐疑的な距離の取り方を見直し、テキストを受容する読者の役割に焦点を当てる。本書は、批評とともに発展し、同時に行き詰まりを抱えていたコンラッドの文学研究を、ポスト批評のアプローチによって再起させるプロジェクトである。以下は各部と各章の概略である。

第I部の各章は、青年の過ちや女性の近親愛を描くコンラッドのテキストに肯定的な見方を示し、ポストクリティークが求める「修復的、回復的読解(reparative or recuperative reading)」に込めている。その際、主要なテキストをラディカルに読み解き、その根底にある理想主義と希望の感覚を発見する。序章となる第一章に続く第二章(Jay Parker)は、コンラッドの主要作品における中心的概念「裏切り(betrayal)」に着目し、それ自体が深刻な道徳的問題を提起すると同時に「前向きな変容(positive transformation)」をもたらすものであることを例証する。『ロード・ジム(Lord Jim)』におけるアイロニカルな語り手は、社会規範を裏切った青年ジムを批判するとともに、別の社会への逃走を手伝い、階級を超えた連帯へとコミットするように導いていることが指摘される。第三章(Rachel Hollander)は、コンラッドの女性表象をテーマに、フェミニズムリーディングと修復的読解を組み合わせた議論を展開している。20世紀

初頭の「新しい女性」小説が女性による政治的な抵抗を描くのに対し、コンラッドが描く女性登場人物は近親間の深い愛情によって家族観を「クイア (queering)」している。一般にミソジニストとされるコンラッドが描く、家庭内秩序に挑戦する女性の姿が見出される。

第Ⅱ部の各章は、主に戦争やテロの恐怖を描くアナキスト・フィクションに目を向け、恐怖に対するコンラッドの理解とその政治的影響に関わるものである。恐怖、パラノイア、疑念を描くことは単にその原因や影響を突き止めるだけでなく、たとえ正当化され得なくとも共感的な理解の及ぶものであることを示すことができる。第四章 (Joyce Wexler) と第五章 (Jarica Watts) は、ともにテロリズムの狂信やパラノイア的な妄信の描かれ方に注目し、それらのもたらす恐怖が共感的な想像力によってより高い次元に向かうことを示唆している。この共感 (empathy) に関して、Wexler はコンラッドのアナキストが異端な狂信者ではなく、実生活を営む人間らしい姿で描かれている点に注目し、彼らの「普通さ」 (ordinary) が「彼ら」と「我々」の間の恣意的な境界を消滅させることを指摘している。一方、Watts は第一次世界大戦を舞台にした短編小説「物語 (The Tale)」を題材に、当時本格運用されはじめた潜水艦一船上を走る船とは異なり、自らの存在を水面下に隠すことができる—の描かれ方に注目する。ここでは、近くに潜水艦がいるかもしれないという想像が生み出す「見えない脅威」が、必ずしも特殊な環境における異常事態ではなく、近年の感染症の流行などにも通じる普遍的な恐怖へと敷衍されている。Wexler が指摘したアナキストの「平凡さ」とは对象的に、第六章 (James Brophy) ではジャーナリスティックな文章で登場するクリシェの「陳腐さ (banality)」にスポットが当たる。長編『密偵 (Secret Agent)』の語りは、新聞・雑誌・政治パンフレットなどのメディアの文体と、時に融合し時に離反し合いながら独自の皮肉を展開する。Brophy は、ハンナ・アーレント (Hannah Arendt) の「悪の凡庸性」を参照しながら、コンラッドのテキストには、自我そのものが日常言語に身をゆだねていく仕組みがその政治的利用可能性とともに描かれていることを指摘している。

第Ⅲ部では、コンラッドにおける倫理と美学の関係を軸に、コンラッドが後続の作家たちに与えた影響や、私たちの教育活動にとって不可欠なツールとなりうるようなコンラッドの創作世界の倫理的営為をさまざまな角度から取り上げている。第七章 (Riccardo Capoferro) は、Hannah Arendt、スウェーデン人作家の Sven Lindqvist、アメリカ人ジャーナリスト Adam Hochschild のテキストをそれぞれ取り上げて、これらの思想家が「闇の奥 (Heart of Darkness)」を試金石にして 20 世紀のトラウマ体験を表象

していることを示す。とくに、チヌア・アチェベ (Chinua Achebe) が非人道的であるとして非難した「闇の奥」の黒人表象が、彼らの記憶の共通性の確立にいかに関心的な役割を果たしているかが強調される。第八章 (Jana Giles) はコンラッドが描く陰鬱なロンドンの中に「崇高な帝国」(Sublime Empire) の姿を見出す。そこでは資本主義の進歩思想やユートピア的な社会主義改革が無益に散っていく。カントの崇高さが「超越的 (transcendent)」な存在を含意する物であったのに対し、Giles が語る 20 世紀的な崇高さは個人に「内在的 (immanent)」であり、進歩や改革の失敗がより深い倫理的目的に向かっていく様子が描かれている。第九章 (Mark Deggan) はマレーを舞台にした作品群を対象に、マレーの各諸島が形成する異文化空間とそこに集まる国際人たちが体現するパフォーマンス性の関係を探る。このような関係性の描写は共同体ごとと大きく異なり、コンラッドが帝国主義政策の政治的帰結について熟慮する用意のある作家であることが明らかにされる。第十章 (Anna Lindhé) は、「物語的共感 (narrative empathy)」のパラドックスを導入することによって、「闇の奥」における人種差別問題に挑戦する。「物語的共感」とは、ある登場人物に引き込まれ、彼らを完全に「人間」として想像すると、他の登場人物に対して反感を抱いたり無関心な反応を示すことで共感が妨げられることである。Lindhé は、この「他者化 (othering)」のプロセスに自分が加担していることを認めることで、その悪影響を回避することが可能であると主張する。もし学生が、コンラッドが人種差別に関与していることよりも、自分自身も他者化に関与していることを認めるように促されれば、教室の内外で、そうしたプロセスにおける自分自身の役割と責任をより敏感に認識することができるかもしれないのだ。

本書は一貫して批評とポスト批評の二項対立の構図を回避し、特に両者の相互依存を強調している。各章は共通して「not A but B」の構文よりも、前者を否定しきらずに後者を強調する「not only A but also B」の構文を多用している。これまでのコンラッド批評が批判や警告に満ちた「恐怖」の解釈であったとするならば、本書はその成果を引き継ぎつつ、その美的経験がもたらす教育的・啓蒙的効能のほうに焦点をずらし「希望」を打ち出す。

各寄稿者はテロリズムからグローバル資本主義、より広範な道徳的問題に至るまで、様々な道具立てによって恐怖から希望に至る筋道を辿るが、その整備された道筋自体が二元的な構造に依存していることは指摘する必要があるだろう。抽象的なレベルで見れば、恐怖を出発点にして向かう先は必ずしも希望に満ちたものばかりではなく、停滞や脱線などさまざまなルートが考えられるだろう。すべての論文が同じ方向に向

けられていることは議論の幅を狭めることになる。こうした点を具体的なレベルで確認すると（目に見えない恐怖をウイルス感染の脅威に結びつけた Watts を除けば）、各論文のテーマが 20 世紀的な事象に集中していることと関連があるように思われる。もちろんここで扱われている帝国主義やアナキズム、人種差別は決して現在の課題と無関係ではないが、より現代的な問題との結びつきが示されることによって新たに価値が再認識されるべきものである。21 世紀において目前に迫ってきたエネルギー資源の枯渇や大規模災害をもたらす気候変動、それに伴う社会の格差や分断の深刻化は、これまで依拠していたあらゆるシステムや思考体系を揺るがすものであり、新たな批評理論を実践する上での基盤となるものでもある。こうした逼迫した現在の課題は「恐怖から希望」という枠組みに適合しなかったテーマであるかもしれないが、教育的な有効性を標榜するポストクリティークを実践する上で欠かせない視点である。その意味で、論文集のまとまりを支えるテーマ的な枠組みそのものが、本書のポストクリティカルな解釈空間を狭めていることは残念であり、今後のさらなる改良が望まれる。

一方で本書の重要な貢献は、読者の受容の方に特別な焦点を向け、読書体験から得られる（あるいは既に得ていた）いわく説明しがたい知識<sup>3</sup>を言語化して再創造しやすい形で提示している点にある。文学作品の豊かなテキストがいかにして個人や社会の潜在能力を図式化し、引き出し、効果を発揮するかを示すことで、本書は前世紀の批評の懐疑的な読みと美的な読書体験の認識との間のギャップを埋めるものである。本書は、こうしたポストクリティカルな理論の実践を、「枠組み」を超えて発展させる可能性を十分に示しており、そうした本書が示す方向性は多くの社会、政治、経済、哲学の論者との接点を導くものでもあるだろう。

## 注

1. クリティークの「脱- (de-)」のアプローチ（「脱構築、脱神秘化、脱認識化、脱安定化 (deconstruct, demystify, defamiliarize and destabilize)」)において、コンラッド作品の価値は主に近代社会が産出した諸矛盾を浮き彫りにし、それを解体し、問題化する能力に比重が置かれていた。一方本書はリタ・フェルスキ (Rita Felski) の対比構造にならい、ポストクリティークの「再- (re-)」のアプローチ（「(再) 補充、再構成、再創造、再想像、再起 (replenish, reconfigure, recreate, reimagine, reinvent)」)を採用することで、そうした批評的関心にそぐわず軽視されてきた側面に焦点を当てる (Rita Felski. "Postcritical Reading." *American Book*

Review, vol. 38, no. 5, 2017, p. 4.)。

2. 本書の編者 Parker et.al.は、情動理論 (affect theory) や表層的読み (surface reading) などのクリティカル・リーディングに対抗する近年の批評理論を広義の「ポスト批評」として取り込むことで、緩やかにポストクリティカル・パラダイムへと移行することを志向している (2-6)。
3. フェルスキはポストクリティークの思想の先駆者として、哲学者マイケル・ポランニー (Michael Polanyi) の名前を挙げている (Rita Felski. *The Limitis of Critique*. U of Chicago P, 2015. p.150.)。ここでは、いまだ読者に浸透していないコンラッドの新しいイメージを塑像しようとする寄稿者らの取り組みを、ポランニー的な「暗黙知 (tacit knowledge)」を言語化・概念化する試みとして捉えている。言い換えれば、読書体験を通じて多くの読者が経験したものの、簡単には言語化することができないでいた知識を掘り起こしていくプロセスである。